THE ANNUAL REPORTS OF
HEALTH, PHYSICAL EDUCATION
AND SPORT SCIENCE
VOL.30, 67-70, 2011

報告書（体育研究所プロジェクト研究）

韓国初等学校体育科における国家水準カリキュラム研究

A study on the national standard curriculum of elementary school health and physical education in Korea

関　根　明　伸，池　田　延　行

Akinobu SEKINE and Nobuyuki IKEDA

Ⅰ．は　じ　め　に

韓国では原則的に６・３・３・４制が採られ、また各教科の教育目標と教育内容も国家水準カリキュラムである「教育課程[1)]」で全国統一的に定められているなど、学校教育の制度と内容はわが国と共通する部分が非常に多い[2)]。初等・中等学校の体育科教育もその例外ではなく、体育科の教育内容は「教育課程」に位置付けられ、これまで戦後では1953年の「第１次教育課程」から2007年の「2007改定教育課程」まで、約10年毎に５度の全面改訂と数度の部分改訂等を経てきたところである[3)]。

しかし、「2007改訂教育課程」以降では、2008年２月発足の李明博政権の下で2009年12月に「2009改訂教育課程」が、続いて2011年８月には「2011改訂教育課程（以下、「2011年版」）」が告示されるなど、近年の度重なる「教育課程」の改訂による教育改革の動向は注目される動きである。また、一般に韓国の教育は激しい受験競争とか、PISA国際学力テストの上位国という点で語られる場合が多いが[4)]、知育や徳育の政策とともに、国家水準カリキュラム改訂に基づいた体育科教育の改革動向はわが国にも重大な関心事となっている。よって本プロジェクトでは、韓国の国家水準カリキュラムと初等学校体育科の目標および内容を検討することにより、現代韓国が志向する初等学校体育科教育の方向性を明らかにすることを目的とした[5)]。

Ⅱ．「2011改訂教育課程」の基本方針と時間配当基準

まず「2011年版」の概要を確認したい。2011年８月９日、教育科学技術部より2011－361号によって「2011年版」が告示された。ここには「教育課程構成の方針」として以下の８点が明示されている[6)]。

（ア）配慮（思いやり）と分かち合いを実践する創意的な人材を育成する。
（イ）「教育課程」は共通教育課程（初１～中３）と選択教育課程（高１～３）で構成する。
（ウ）学年間の連携と協力により教育課程に編成・運営の柔軟性を持たせるため学年群を設定する。
（エ）共通教育課程における教科を教科群へ再分類化する。
（オ）選択教育課程における科目は四つの教科領

国士舘大学体育学部こどもスポーツ教育学科（Dept. of Sports Education for children of Physical Education, Kokushikan University）

域に区分する。

（カ）履修教科目数の縮小と学習負担の適正化、有意義な学習活動のために集中履修を拡大化する。

（キ）「裁量活動」と「特別活動」を統合した「創意的な体験活動」を新設する。

（ク）教育課程の評価と教科編成の改善、国家レベルの学業成就度評価により教育課程の質管理体制を強化する。

（下線は筆者による）

次に、「2011年版」における初等学校の時間配当基準は表１の通りである。

Ⅲ．初等学校体育科の教科目標および教育内容

１．体育科教科目標と「追求する人間像」

「2011年版」における初等学校体育科の目標は以下の通りとなっている。

「体育科は、身体活動価値の内面化と実践を通した全人教育を目標とする。すなわち、身体活動を通して、活気に満ちた健康な生に必要な知識と実践能力、自身の将来を啓発するのに必要な挑戦的能力と創意的な思考力、そして共同体生活に必要な善意の競争と協同能力等の望ましい人間性を涵養することを目標とする。[7]」

また、「2011年版」には「体育科で追求する人間像」という項目があり、そこでは以下のように示されている。

「体育科で追求する人間像は、身体活動により総合的に体験することで、身体活動の価値とともに、創意・人性[8]を内面化して実行する人である。すなわち、身体活動に持続的に参与しながら、体力および運動能力、創意的で合理的な思考力、スポーツ精神と共同体意識等の能力を持ち、自身の生を自ら啓発し、汎世界的な身体文化の継承・発展に貢献できる人間である。」

２．体育科の内容

次に、体育科で教える内容はどのように選定され、如何なるスコープ（範囲）とシーケンス（系列性）で整理されているのか。初等学校３～６学年の体育科の内容は[9]、「2011年版」では「内容の領域と基準」として表２のように明示されている。

Ⅳ．ま　と　め
―「2011年版」が志向する韓国体育科教育―

以上より、韓国の「2011版」は、「配慮（思いやり）と分かち合い」を備えた「創意的な人材」

表１　「20011改訂教育課程」の時間配当基準

区分		1～2学年	3～4学年	5～6学年
教科（群）	国語	「国語　448」	408	408
	社会/道徳	「数学　256」	272	272
	数学		272	272
	科学/実科	「正しい生活128」	204	340
	体育	「賢い生活192」	204	204
	芸術（音楽/美術）	「楽しい生活384」	272	272
	英語		136	204
創意的な体験活動		272	204	204
学年群別総授業の時間数		1,680	1,972	2,176

１単位時間は40分。数字は年間時数を表す。

教育科学技術部『初・中等学校教育課程総論』、４頁より。

の育成を前提の方針に掲げ、以下の三点を大きな方向性として打ち出している点が明らかとなった。すなわち、①「教育課程」の共通教育課程と選択教育課程による再構成、②学年群および教科群の概念の導入、そして③「創意的な体験活動」の導入、である。

まず①については、「教育課程」が初等学校１年～中学校３年の共通教育課程と、高等学校での選択科目による選択教育課程という二つのカリキュラムで構成されたことを意味する。つまり、「教育課程」の全体が、義務教育段階とそれ以降のカリキュラムという大きな二つのカテゴリーで分類されているのである。②の学年群とは、連携し協力しながらカリキュラム運営を行う複数学年のグループを意味する。初等学校では１～２学年、３～４学年、５～６学年という三つの学年群に分かれている。また教科群とは、教育目的上の近接性や学問的な隣接性によってまとめられた教科のグループを指す概念である。例えば、社会科と道徳科で「社会／道徳」が、科学科と実科では「科学

表２　韓国の初等学校体育科の内容体系

領域	初等学校			
	３～４学年群		５～６学年群	
健康活動	（ア）健康と生活習慣 ・運動の段階と方法 ・個人の衛生および疾病予防 ・家庭の安全、事故予防 ・自己認識	（イ）健康と体力向上 ・基礎体力の類型と増進 ・肥満予防および健康な食生活 ・学校の安全、事故予防 ・自律性	（ア）健康と身体の発達 ・健康体力の類型と増進 ・体の成長と変化 ・災害予防 ・自己理解	（イ）健康と災害安全 ・運動体力の類型と増進 ・と飲酒の被害 ・災害予防 ・状況判断力
挑戦活動	（ア）速度の挑戦 ・意味と特性 ・基本機能 ・測定及び評価 ・ねばり	（イ）動作の挑戦 ・意味と特性 ・基本機能 ・動作構成及び評価 ・勇気	（ア）距離の挑戦 ・意味と特性 ・基本機能 ・測定及び評価 ・問題の発見	（イ）標的/投機の挑戦 ・意味と特性 ・基本機能 ・測定及び評価 ・自己調節/他の人の尊重
競争活動	（ア）逃避型競争 ・意味と特性 ・基本機能 ・ゲーム戦略の理解及び創意的適用 ・規則遵守	（イ）領域型競争 ・意味と特性 ・基本機能 ・ゲーム戦力の理解及び創意的適用 ・協同心	（ア）フィールド型競争 ・意味と特性 ・基本機能 ・ゲーム戦略の理解及び創意的適用 ・自己責任感	（イ）ネット型競争 ・意味と特性 ・基本機能 ・ゲーム戦略の理解及び創意的適用 ・運動のマナー
表現活動	（ア）動きの表現 ・動きの言語と表現要素 ・動きの表現方法 ・創意的表現及び鑑賞 ・身体認識	（イ）リズム表現 ・リズム表現の類型と要素 ・リズムに合わせた身体活動表現方法 ・創意的表現及び鑑賞 ・身体適応力	（ア）民俗表現 ・種類と特徴 ・民俗表現方法 ・創意的表現及び鑑賞 ・多様性	（イ）主題表現 ・構成原理と創作過程 ・動きの創作表現方法 ・創意的表現及び鑑賞 ・独創性
余暇活動	（ア）家族と余暇 ・意味と特性 ・余暇活動の創意的計画 ・自分と家族の余暇活動体験 ・家族愛	（イ）伝統の遊びと余暇 ・意味と特性 ・伝統的な余暇遊びと創意的計画 ・創意的計画 ・伝統的な余暇遊びの体験	（ア）生活環境と余暇 ・意味と特性 ・生活型余暇活動の創意的計画 ・生活型余暇活動の体験 ・共同体意識	（イ）自然環境と余暇 ・意味と特性 ・自然型余暇活動の創意的計画 ・自然型余暇活動の体験 ・自然愛

教育科学技術部告示　第 2011－361 号[別冊 11]　『体育科教育課程』9 頁より。

／実科」という教科群が形成されるのである。これらの学年群と教科群の概念は、学年間や教科間の垣根を低くして一層柔軟なカリキュラム運営を可能にしようとしたとされる[10]。そして③は、「特別活動」と教科外の「裁量時間」が統合され、新たに「創意的な体験活動の時間」に集約されたことを意味する。つまり、今回から「教育課程」は「教科」と「創意的な体験活動」の二つの領域から再構成されるようになったのである。

以上より、「2011版」ではこれまでの「教育課程」全体の枠組みが変更されており、教科の数やカリキュラムの運営方法に大きな改革がなされたことが理解される。この背景には、「国家レベルの共通性と地域、学校、個人レベルの多様性を同時に追求する」こと、「学習者の自律性と多様性を伸長させる[11]」ことによる多様性への対応、そして「学期当たりの履修科目数の縮小による学習負担の適正化[12]」や完全学校５日制への対応が現実的な課題として考慮されたことをあげることができる[13]。

また体育科については、「身体活動価値の内面化と実践」による、全人教育、すなわち「知識」、「実践能力」、「挑戦的能力」、「創意的な能力」、そして「望ましい人間性」を総合的に育成することを目的とした点が大きな特徴となっている。このことは、体育科が活動を通しての価値の内面化を図る教科であること、つまり、価値実現を前提とする身体活動が意図されたことで道徳教育的な体育教育の指導が一層強調されたとみられるのである。そのような意図は内容構成にも表れており、例えば、日本の体育科小学校学習指導要領においては、内容が運動の形態あるいは種目別で示されているが、韓国ではスコープを「健康活動」、「挑戦活動」、「競争活動」、「表現活動」、「余暇活動」という五つの「身体活動価値」に分類し、シーケンスをその目的性からみた段階にもとづいて設定されている。

このような「2011年版」の有効性は、今後の現場実践での成果から検証されていくべき課題である。しかし、以上で見たようなカリキュラム枠組みの再構成化や運営の柔軟化、そして体育科教育内容等の捉え直しは、わが国の体育教育にも大きな示唆を与えるものと考える。「2011年版」の成果の検証については今後も課題としていきたい。

本研究は、2011年度国士舘大学体育学部附属体育研究所の助成により行われた。

引用・参考文献

1）ここでは、カリキュラムの訳語としての広義の意味と区別するため、韓国の国家水準カリキュラムを「教育課程」と表記する。

2）関根明伸：韓国，教科等の構成と開発に関する調査研究　研究成果報告書（20）道徳・特別活動カリキュラムの改善に関する研究―諸外国の動向（2）―，国立教育政策研究所，1-21，東京，2005.

3）劉奉鍋：韓国教育課程史研究，教学研究社，ソウル，1998，308-446.

4）文部科学省の「OECD生徒の学習到達度調査～2009年調査国際結果の要約～」によれば、日本の総合読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーにおける順位が、８位、９位、５位あるのに対し、韓国はそれぞれ２位、４位、６位となっている。http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/data/pisa/index.htm

5）本研究を遂行するにあたり、平成23年８月８～９日にソウル教育大学体育科のパク・ミョンギ教授にインタビュー調査を行った。

6）教育科学技術部：教育科学技術部告示第2011－361号［別冊１］初・中等学校教育課程総論，2，ソウル，2011.

7）教育科学技術部：教育科学技術部告示第2011－361号［別冊11］体育科教育課程，7，ソウル，2011.

8）「人性」という語は、「人格」あるいは「品格」と同じような意味で用いられている。

9）初等学校１～２学年には体育科が設置されていないが、実質的には体育と音楽、美術との統合教科である「楽しい生活」という教科の中で行われている。

10）教育科学技術部，前掲書，５.

11）教育科学技術部，前掲書，３.

12）教育科学技術部，前掲書，２.

13）韓国の初・中・高校では、2005年７月より月一回の週五日制が導入され、2006年から月２回、そして2012年３月からは完全週五日制が開始される予定となっている。文部科学省：諸外国の教育改革の動向，ぎょうせい、東京，298，2010.